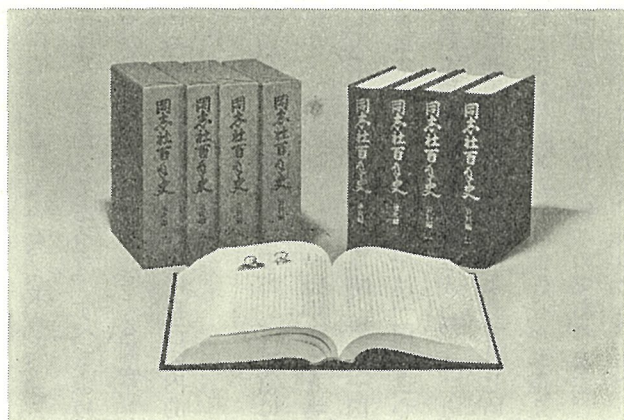


『同志社百年史』を語る



出席者（ABC順）

中学校元校長 久永省一

文学部教授 北垣宗治

国際高等学校校長 仁井國雄

法学部教授 西田毅

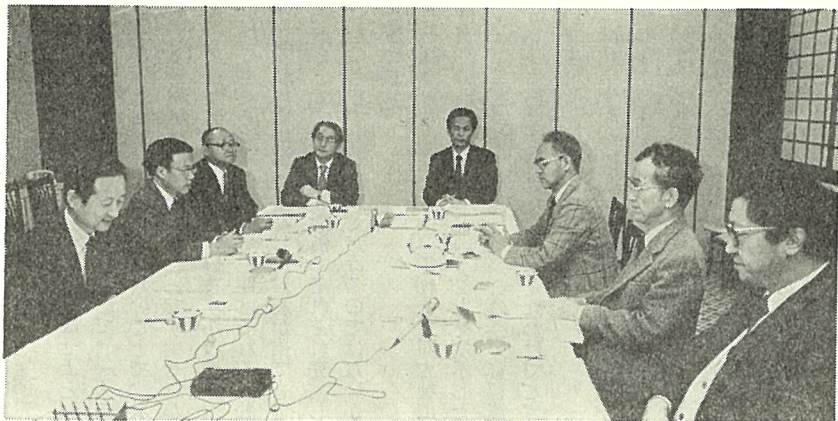
神学部教授 緒方純雄

人文科学研究所教授 杉井六郎

文学部教授 住谷馨

（司会）宮澤正典

（女子大学助教授）



宮沢 今日では『同志社百年史』を語るとい
う集いではありますが、じつは四、五日前に、
しかも書物ではなくグラ刷のコピーがようや
くお手もとに届いたというようなことで、昨
晩読みおえたとか、ここへいらっしゃる直前
に読了したとか、たいへんご無理な条件のも
とでお話いただくことになりましたして心苦し
く思います。

すでに、百年史に関して和田洋一先生が、
『同志社タイムズ』に『同志社百年史』にか
ける期待（第三〇六号）を述べておられま
すが、たとえばこの『百年史』がそれに対し
て、はたしてどれだけ応えているか。また、
北垣宗治先生は『同志社百年史』の七つの
特色（第三一九号）を指摘しておられます。
その他、同志社の内外の方がたや国の内外の
各機関から同志社の百年史について期待や注
目が寄せられているということもかがって
おります。

杉井先生、北垣先生、『百年史』では、どう
いうところに重きをおいて編纂にとりくまれ
たのでしょうか。

杉井 この企画が成功したかどうかは、ま
た後日ご批判をいただけたと思いますが、か

いつまで申し上げることにいたします。

第一は、近代日本百年の中で同志社の百年
の問題を考えてみたい、そういう歴史的状況
に照応、即応しながら同志社の中で起きた事
件を主題にして百年史を書きたいということ
を念頭におきました。従来の『五十年史』、
『九十年小史』、六〇年のときの『我等の同志
社』、それから八〇年史稿をもとにした『一
私学の歩み・上』などでは、何れも法人とか
学部別とかの縦割りの歴史なんですね。今回
は横割りで主題をとらえて書きたい、また何
何総長時代というような形で時代を区切って
書くこともしないという考え方は貫こうとし
ました。

第二は、『五十年史』はすぐれた学校史だ
と思いますけれども、その編纂の企画、進行
過程をみますと、かなり記憶によって書かれ
ております。ですから、生きいきとした文章
であることは確かなんですけれども、しっか
りした史実に基づいて客観的に叙述されてい
るかという点、そういう点ではうらみがござ
います。今回は資料に基づいて客観的に叙述
しよう、そのためには、同志社の中の恥ずか
しい事態にも目をつむることなく、正確に書

いていこうということが企画の中では確認されたこととございました。

三番目は、百年史を三カ年で達成せよという総長からの命令もありましたので、一人で書くということはとても出来ないことで、共同の分担執筆体制をとったことです。そこから生まれたデメリットといいますが、遺憾な点がございいます。それは、主題はそれぞれ独立しておりますが、重複した言及が出てきていることです。しかし逆に、それぞれ完結したものであるとお読みいただけるのではないかと思います。

それからもうひとつは、これまで同志社にはどういう資料があるということを示したことがございませんでした。この際、資料篇をつけた正史を書きたいと考えたわけでございます。

編集がすすむにしたがって出てきた問題が幾つかあります。ひとつは、主題の選び方について、こういう主題もあるのではないかとということ、そのため編集の過程であらたに主題を設定したり、あるいは二つに分別するなどのことを行ないました。いま、採り上げることの出来なかった心残りの主題のうちひ

とつだけ挙げますと、同志社には早くからハワイから学生がきます。やがて台湾、朝鮮、中国から多くの学生がきます。彼らが百年の歴史の中で、どういう学生生活を送り、どういうことを主張したのかということは、ついに主題化しえなかったものです。

史料の点で申しますと、総長から話がありましてからちょうど一カ月、もっぱら史料の整理に費しました。その結果、現在は百年の歩みを史料的にも見ることができるようになったという副産物もございいます。

北垣 私のはうからはほとんどつけ加えることはございせんが、ただ、同志社の百年がどこから始まるのかということで、一八七四年一〇月のラットランドの集会をもって同志社の出発の最初にするのと定めたことは、ひとつの見識を示す意味で必要であったと思っております。たまたまこの集会の新聞記事がケーリー先生から紹介されたことも『百年史』の新しさのひとつのポイントでありました。

それから『九十年小史』に対する批評といえますか、そこからスタートしていることが言わず語らずのうちにあったように思います。たとえば、東華学校のことを全然触れら

れていないということで、こんどは永永先生にこの歴史を書いていただきまして、その点で新島の幅広い活躍が明らかになったと思っております。ところが、こんどこうやって発刊されるころまできますと、それでは新潟の北越学館はどうかということを最近痛感します。東華学校ほど経営にのりだしたわけではありませんでしたけれども、新島の頭の中にはそれと並ぶくらいの気持が北越学館に対してありはしなかったか。これは次に残された宿題のひとつであると思っております。

もうひとつ、人物の名前によく注意をはらおうということで、今回はできるだけ振仮名をふるようにながなってまいりました。宣教師の名前も、できるだけ原綴りを出しましたのみならず、それを表記にする場合、原音にいちばん近づけるという方法をとりましたので、デイヴィスをはじめマッキンヴァーとかゴードンというふうに改められました。

その他これはのちほどお話が出ると思いますが、大学のなかの各学部別の歴史という観点からのアプローチが弱かったと思っております。

宮沢 それでは、ご執筆いただきました周



杉井 六郎氏

辺から、こういうところに光をあてることができたとか、あるいはここにもう少し目を注ぐことができたのではなからうかと、そういう点をはじめにうかがいましょう。

仁井 じつは昭和五二年に同志社女子中高が創立百年を迎えまして、女子部の百年史を書けないかというプランがございました。しかし結局はせめて女学校に関する資料を集めて資料集のようなものができないかということに落ち着いたわけでございます。

ところが、明治一〇年くらいから明治二六年くらいの間ほとんど資料がない。非常に困っておりますところ、杉井先生から人文科学研究所にABC FMマイクロフィルムがある、そのなかにはスタークウェザーらの手紙が残っている、それはいわばアメリカン・ボ

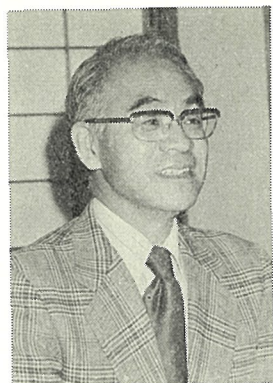
ード側から見た女学校でございましたけれども、そういう資料があるから、それを使ったらどうかとお教えをいただきました。それが手書きの英文で、しかもマイクロフィルムにおさめてあって非常に読みにくいのですけれども、それを利用していただいたものが『同志社女子部の百年』（同志社女子中高、昭和五三年刊）に載せてあります。

女学校の開校にあたって、ボード側がいうように、トレーニング・スクールとしての同志社英学校があつて、それからボーディング・スクール、つまり伝道者の妻を養成する、あるいは女子の伝道師を養成するための学校という意味での同志社女学校があるという考えが一方にございますが、これに対して、たとえば丹波清次郎校長の「わが同志社は故新島総長創設のはじめより宣教師学校にあらずして基督教主義学校なり」（『同志社時報』明治三九年七月二五日）というような考え方がございまして、いったいそのどちらに重点があつたのかということが非常に疑問になりまして、そうした点から書いていくならばある程度まとまったものができるのではなからうかと考えました。

新島はもちろんキリスト教主義の学校をつくる目的で帰国したのでございますが、女学校を同時につくるという考えがあつたのかどうか、私の言い過ぎかもしれません、むしろ、デイヴィスには神戸のボーディング・スクールの母胎に大阪にも京都にもそれをつくるべきだという考えがまずあつて準備していた。ボードに対して女子の教師を京都に送れというような手紙を書いておりますね。そういう状況のところへ新島が帰国した。この辺に女学校の起源が示唆されているような気がして書きました。

宮沢 そのほかのところでも、そういう新しい光をあてた部分がたくさんあるうかと思ひます。

久永 まず普通学校の方でその新しい光といたしますのは、明治三年に第二次の同志社普通学校が生まれたのですが、それまでほんとうに目まぐるしく学制改革が行なわれていたわけですね。外部の圧迫、徴兵猶予の問題のために入学する者が少なく、また退学する者が多い。なんとかしてそれを防ぎとめようと当局はしたのだと思ひますけれども、私は『九十年小史』を読みまして、この目まぐる



北垣 宗治氏

しく変っていくのが何か乱れているような感じがしておったんです。それで資料室へ行きますと、「入学者心得」というのが各年度ごとにありますね。それを十数枚コピーしていただきました、家に帰って畳の上になんと並べたんです。あまり複雑なものですからね。その上に使っている教科書名を缺って切って載せていきました。すると一貫した流れが透きとおって見えてくるんですね。こうした透視を生かして、予備学校から普通学校への叙述ができたわけです。そしてこの第二次の同志社普通学校が現在の中学校・高等学校に引継がれているわけです。

もうひとつの東華学校は、片桐家から哲先生のお父さんの清治さんと東華学校について何かまとめてくれないかというお話もありま

した。私も前から関心をもっておりましたが片桐家から資料もいただきましたし、森中章光さんのお助けもありましたし、それからデフォレストの東華学校辞任のときの基督教新聞に発表された文章ですね、それがどうしても手に入らなかったんですが、杉井先生にお願いしましたところ、マイクロフィルムにあるだろうということで探していただきましたが、四二八号というのがないとおっしゃってがっかりしてましたら、あとでまた電話がありました、どこでしたか……

杉井 いや、同じ所からです(笑)。

久永 それではどこにかみつかりまして、ホッとして筆が進んだわけなんです。新島と東北学院の押川方義の二人の葛藤というのはほんとにドラマティックで、劇になると思うんですね。新島が亡くなって東華学校がつぶれて、押川が東北学院をつくったのですが、新島は押川をおそろしい人物だと言ってるんですね。「おそろしい」という字が「恐」ではなくて「畏」なんです。だから必ずしもそう悪い意味ではないかも知れませんが、それととにかく新島が警戒したことは確かなんです。「新島日記」も仙台の最後の二週間のと

ころがないんです。でも、推測するところでは、白熱の討議が行なわれたにちがいないんです。そしてあのけんまくの強い押川が一步退き、仙台神学校でがまんして、新島は英学校を建てる。新島の勝利です。だけどその後東華学校は傾斜していくわけです。五年のち押川は、デフォレストら宣教師団辞任のチャンスをとらえて、急遽仙台神学校を東北学院に改組したということが推測できると思うんですね。そんなところで押川はかたきを討ったということが言えるわけです。とてもドラマティックだと思いますね。光をあてたというのとはそういうことなんです。

宮沢 ドラマティックなことは、各学校でおこっているのではないでしょう。女学校では新島八重対スタークウェザーらの葛藤、これは始めて光をあてたことだと思うのですが、そのとき新島襄はどういう態度をとっていたかということとはわかりませんか。

仁井 案外、黙っていたのところがいますかね(笑)。

宮沢 日本における最初の看病婦学校ではどうだったのでしょうか。

北垣 看病婦学校は、例の大村達斎という



久永 省一氏

医者、かれはデイヴィスとも知り合いだったのですが、この人との協力ないし結社ということでスタートしかかって、いろいろ経緯があったわけですね。しかし看病婦学校と同志社病院の終りもドラマティックだと思えますね。リンダ・リチャーズという当時のポストンきっての看護婦が来て、最初の看病婦学校の指導にあたるのですけれども、この人はただ単に看護婦としての指導をするのみならず宣教師としての伝道の熱意に燃えていて、後任の看病婦学校の指導者を送ってくれということアメリカン・ボードに申し込んで、やっとその念願がかなって次の人が来るんですが、来てみると両者は対立するようになるんですね。宣教師団は一枚岩のように頑丈と思うんですが、個々の宣教師はやはりそれぞれ

人間であって個性が強く、宣教師の間で、女性同士の場合とくにその火花が散った。

住谷 この私学会館の辺は、看病婦学校の跡であってこれもドラマティックで(笑)。

宮沢 ドラマティックと言えば、新島の自杖はこれまでいろいろ語り継がれてきましたから……。

杉井 私は、新島の自杖を目撃した人の資料を集めて、いわば現場をなるべく克明に描写してみようという努力をしました。そのときに列席していた人の記録しているものとしては、徳富蘇峰のものと原田助のものがございます。しかし、その事件がだれによって、さっきからドラマという言葉が使われますので、ドラマティックに表現されたかという点、堀貞一が自分でも杖の切れ端を持っておりまして、昭和の初め、海老名に招かれてハワイからやってきて、同じような姿勢で話をするわけです。堀貞一のそのときの説教の姿勢で、私がいまでも感激しておりますのは、自分はコンマ以下だということを説教の中で言うんですね。すでに頭角をあらわしている熊本バンドの人たちからすると、自分はコンマ以下だった、それほど新島から認められて

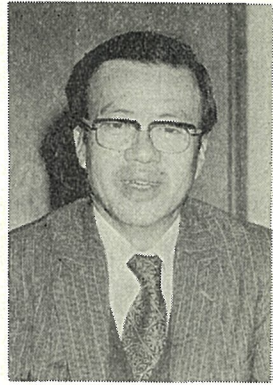
いなかった。しかし新島が行なったことを自分はいちばん身にしみて思ったし、自分としてはそれを伝えたいという姿勢が同志社教会で行なわれた説教にあって、非常にたくさん受洗志願者が出て、熱狂的といえますか、白熱的な信仰が浮かび出てきたのではないかなと思うんですね。

久永 新島に自分は亀岡で伝道したいと申し出たら、おまえはまだ若いからやめておけといわれた。それで御所へ行つてワーワー泣いたということが何かに書いてありました。それでも振り切つて亀岡へ行つて伝道しているんですね。まだ一五歳ですよ。

宮沢 そうした伝道と同時に、また社会事業の面で同志社の卒業生たちの果たした役割というものは非常に大きくて、これはおそろしく慶応とか早稲田などとちがった人物を生み出した同志社的な特徴だろうと思います。

住谷 その点ですが、同志社にはキリスト教社会主義の流れと、キリスト教社会事業の流れと二つあって、明治三〇年代になると社会事業の流れが大きくなるんじゃないかと思っています。

新島自身の考えていたキリスト教は、やは



仁井 國雄氏

り社会的実践と結びついたキリスト教であつたろうと思います。ですから、同志社を出て実際に社会事業家になっていく——貪しさとか社会の矛盾に関して身を挺していくのが神の心であるという形での社会事業ですね、それが同志社から発生しているということで、近代的な意味での社会事業というものに非常に大きな方向づけをつくった。

それと松岡荒村、大石誠之助はいままで同志社の歴史からは隠されていた人じゃないかと思うんですけども、戦後までの流れの中で同志社では恥として考えたんじゃないかと私は思うんですね。安部磯雄は大きな人物ですから、社会主義の父として位置づけされているんですけども、こういう隠された部分を再評価するということは、いまの時点で必

要だろうと思うわけです。

最近、留岡幸助の著作集（全五巻）をわれわれ編纂することができたのですが、留岡は同志社の牧師から出発して社会事業家として多面的な活動をします。とくに感化事業の開拓者として日本で不良少年の感化教育を科学的にやり始めた人ですし、明治二四年に北海道空知の集治監に教誨師として行くわけですから。当時の北海道の監獄の状況というのはたいへんなひどいものであった。そういうところにかかはり込んでいくわけです。同志社のキリスト教教育の中身をみずから実践した人物ですね。それから山室軍平も忘れることはできません。

明治三〇年代は日本の激動期でしょう。日清日露の国威発揚の時期で、一方では日本資本主義が高度成長するし、同時に矛盾もどんどんつくり出した。そういうなかにあって、新島亡きあとの同志社人のあり方を、こういう人たちが身をもって示したんじゃないかというふうに思っています。

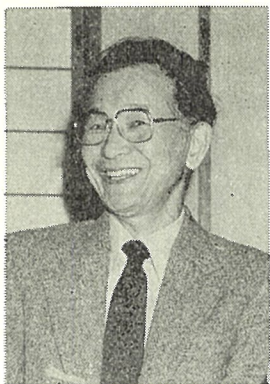
宮沢 そうした人たちにあらわれてくる、いちばんコアの部分で同志社的なものとしてキリスト教はどういうものであったのか、教

育の場における宗教的なものがどういう形で培われていっているかということ、あるいは同志社の神学の特徴というのとはかなりユニークなものと思うのですが……。

緒方 同志社のキリスト教の基本にあるものは、リベラルな神学という言葉で表現されていますが、必ずしも厳密な神学規定での自由主義神学あるいは自由神学という意味で使われていないように思います。むしろ、信条中心的な神学とか、狭く限った教会的な神学からの自由というものをモチーフにした神学の立場であつたと思います。

次の特徴は、信仰に基づいて神との関係で生かされる人間の主体的自由と責任、ここから出る行為、そうしたものが強調されていく立場であるように思います。新島の背景をなすニューイングランドのピューリタン信仰は既成の信条主義的な教会、あるいは教会と結びついた国家体制からのエクソダスとして新大陸にやってきたので、それがいちばんリベラルな神学の基本をなしているように私は思うのです。

もうひとつの点は、この立場は当然ものをオープンにリアルに見ていこうとする視点を



緒方 純雄氏

備えていた。さきほど住谷先生が言われたように、たとえば社会の問題をリアルに見すえていこうとすると、か、ニードをそのまま見てそこに責任をもつ姿勢をもった人間形成がこの神学から生まれてくるのだと思います。そうしたものが同志社の神学部において伝統として伝わってきているように思うのです。

一九二三年に『基督教研究』が発刊されましたが、これが日本ではもともと長い歴史をもつ神学雑誌であります。一九二〇年に大学令による神学校として発足しましたが、学問としての神学を研究雑誌をとおして進めていく姿勢が非常に強いですね。創刊号で大塚がキリスト教神学のなかに本質学という分野を定立しまして、キリスト教信仰の本質を確かめるということは当然のことですが、それと

ほかの宗教との批判検証のなから本質概念をとっていく、あるいは倫理学、価値哲学から本質をえていくという、当時としては他に見ることができないような方法論を主張して学問的なレベルで『基督教研究』を始めたと言えます。昭和十七年に他の神学校との合併問題がおこりますが、それを非常に強硬に拒否したひとつの基本的なよりどころに、そうした神学と研究の伝統と主張があったように思うのです。私は昭和十七年に神学部に入りましたが、そのころよく聞かされたのは、同志社が大学としての唯一の日本における神学校だということでありまして、合併問題に対する姿勢も、そうしたものがモチーフになっているのではないだろうかと思えます。

宮沢 同志社百年というのは広範囲に及んでおり、いますべてをフォローできませんが、同志社大学設立のための募金運動、その結果としての明治末の専門学校令による同志社大学、さらに大正期の大学令による同志社大学時代については触れておきたいと思えます。あわせて大正デモクラシーと原田・海老名時代の同志社というのが密接につながってくるように思いますが、はじめに杉井先生、

ついで西田先生にお願いします。

杉井 新島が本格的に同志社大学設立の訴えをいたしますのは死の二年前で、モデルはアーモスト大学であったと思われます。何とかして官立でなくて私立で形成をしたいという考え方は、当時大学を名のっているのは現実には東京しかないわけで、関西に大学をということは、新島の死に至るまで非常に大きい願望であったわけです。そういう新島の訴えが、全国津々浦々に新聞雑誌をとおして普及をしまして、いまでも非常に驚きますのは、たとえば福島監獄の囚人までが一口一〇銭という大学の義捐の募金に応じていること、慶応、立教や第一高等学校から学校の枠をこえて学生が同志社の義捐金に応じているという姿勢、それから一致教会、メソジスト、バプテストとか教派をこえて新島の私立大学を創るという運動に賛助応援している点は、いまそういう訴えをしてもまったく望めないことで、この時期の運動として注目すべき運動であり、関心をたかめたものであったと思うわけです。

ところが新島の死後、一時期はむしろ募金高は上るんだが、二年ぐらいますとずっと



宮沢 正典氏

落ちてしまいます。それ以降の小崎、西原、片岡時代は学生数も減少しますし、アメリカン・ボードとの対立もあって財政的に非常に不如意で、もう同志社の寮は閑古鳥が鳴いて寮生はいない。そして中国人のための善隣学園に施設の一部を貸与するというようなことで、新島の在世中につくられた政法学校、理化学学校、同志社病院、京都看護婦学校、東華学校というのはすべてなくなってしまうというような時期に、校友がサポートしまして、原田助を担ぎ出して新島の遺志を継承しようとする、それが明治四〇年からの動きでございます。

海老名時代というのは、いわば原田が敷いた路線を継承していくということが基本であったと思いますが、原田のぶつかった問題

は、専門学校令による大学ができて、学生数もふえ、大型になっていくとしたときに、同志社の正統は何かという意識はたえずあったと思います。そういう正統論のようなものがたえずあって、原田時代に大きくなった同志社のなかで、普通学校あるいは普通学校の出身者から原田の拡大膨張した教学体系に批判が向けられてきた。原田は結局、大正八年にそれで辞めざるをえなくなる。

そのあとの収拾はいったいどうするのかというところ、もう少しリベラルな人を同志社の総長の椅子に据えて、時代に即応した教学を展開しようというようなかじとりを校友がしたのではないかというふうに思います。

宮沢 校友の果す役割割り、これはまたそれぞれに功罪があるかと思いますが、いわばそのひとつの成果としての大正期をとらえることができますね。

西田 私は学校史という仕事に不慣れなものですから、正直言って与えられたテーマをどう扱ったらよいのか、その方法に少なからず苦心いたしました。私なりにいくつかの柱を立てて「大正デモクラシーと同志社」という問題を考えてみました。第一は大学令に

よる同志社大学の最初の総長であり学長でもあった海老名の思想について狭く教育思想に限定せずにもう少し広く思想全般にわたってその特徴を見るところ。第二は海老名総長の時代に開花したといわれております同志社アカデミズムの形成と展開の問題。第三は教員に限らず、より広い学園の構成員、つまり学生とか職員層における当時の大正デモクラシー状況の反映をうかがうことはできないだろうかという問題ですね、すなわち、そのひとつとして近代日本における学生運動の全般的な組織化との関連において、同志社における学生の文化運動というものを掘りさげていけば何かおもしろい観点が発見されるのではないかというふうに思っています。

そこで海老名の教育思想ですが、人格主義、国際主義、男女共学がその中心にあったことは周知の事実であります。軍事教練をキリスト教学園において実施するという点についてかがいいたという姿勢を示したかという、興味ある問題がございます。また、学連事件に対して示した海老名の態度なんです。結論的に申しますと、かれは共産主義は危険思想であるとはっきり言っておりま



岩谷 圭氏

す。それからかれの皇室観、国体認識の問題。かれの在任中に皇后陛下が同志社女子部に行啓したときの無邪気な感激ぶりが印象的です。そのときかれは「キリスト教が国体や伝統的な臣民倫理、忠君愛国の観念とはけっして衝突しない。両者は等質であり、補完的なものである」ということを言う、そこには、かれ一流の幅の広い「撰取包括」の姿勢が展開されている。先ほどの軍事教育にしても「人格教育の実施という共通の目的のもとに、軍隊教育もキリスト教教育も矛盾なく融合しうる」というようなことを言うわけでありまして、いま述べましたような諸点は海老名のリベラリズムの性格を考える場合、あらためて検討してみるべき具体的な問題点なのではないかと思っただけです。それから同志

社アカデミズムに関して、その背景となった大正デモクラシーと、彼らの構築した学問的な理論体系がどのように内面的なかわりをもっているのかという問題、これはやはり探ってみたい問題のひとつであります。中島重、今中次麿らが、そのころ『同志社論叢』に次つぎと労作を発表していましたが、それらはわが国の政治学界や公法学界において高い理論水準を誇っていたことは周知の事実であり、その意味でまさに彼らは一時期、日本の斯学をリードした観がありました。

また、学内における大正デモクラシーの状況で印象に残っておりますのは、校友会神戸支部の秋守常太郎が総長公選制の提唱をしていることであります。そのほか財政と教学との権限上の責任分担といえますか、財政通の理事が教学上の問題に深くコミットすることの危険性を指摘するような声が出ておりまして、そういう機構改革や学園組織の民主的運営といった問題に対する関心にも大正デモクラシー状況の反映を見ることができているのではないかとこのように思っただけです。

ところが、海老名はこの組織改革の問題になりますと、かれの考え方はそれほど透徹し

たものではありません。したがって、大学の自治と教授会の権限をどう考えるかという重要な問題についても海老名のリベラリズムは一向に牙えを示さないのです。

昭和になりますと、中島重は純粹の学究からキリスト教社会主義的な実践運動（労働者ミッション）にかかわりをもっていくわけですが、大正デモクラシーの時代に開花した同志社のアカデミズム（政治学のレベルにおいては高い水準を誇示しえたにもかかわらず）には一方、社会的な関心の持続といえるでしょうか、研究室に沈潜することには満足しきれない何ものかが内在していて、中島を含む多くのアカデミシヤンのなかに生き続けたということ、この学問と社会的関心の共存の問題は私にとっては、この時代を勉強してあらためて発見した問題点でありました。中島の学問から社会的実践への推移の動機の究明とともにこんど関心をもち続けたいテーマのひとつです。

宮沢 さて、ここで昭和を迎えることになります。その前に「騒動の同志社」と総長退陣にからめてうかがっておきましょう。

杉井 いちばんはじめの騒動というのは明



西田 毅氏

治一三年だろうと思いますが、徳富蘆花をはじめとする学生のストライキであります。それから明治二八年のアメリカン・ボードとの対立のなかで起きた問題、それから原田のときに起きた問題、海老名の……というふうに、各総長が辞めるときに、北垣先生がこういうことを書いておられるんですね、「石をもつて追われる」と。そういう辞め方をしている。その時どきにはいい格好をする人はちゃんといるわけです。しかしそれは本当に事態を解決するような形であるかという、非常な犠牲者を出し、しかも、そこで提起された問題の解決は本質的にはなされないで百年を経過したように思いますね。

ですから、たとえば金森の自叙伝を読みますと、「再び同志社の校門をくぐるまい」と

いうことを書いておりますね。それから浮田和民が明治二八年に辞めたあとで、専門学校令による大学ができて、浮田は校友会の代表として挨拶します。そのときに「もう再びくるまいと思った同志社に来て……」という言葉を述べていますね。

宮沢 社長、総長にして、その任を去る時点で、新島のように同志社を挙げて惜しまれたということはございませんか。

杉井 海老名はそれに近い一部の動きがあつて、辞任反対のサポートがあつたのでよい紛乱をしたんですね。小崎の辞めるときも、やはり一部支持したので、柏木、浮田らが辞めざるをえなくなつてしまつたのです。

宮沢 一方、大工原、湯浅の両総長についての見方には、『百年史』に書かれたのとはちがつた、たとえば田畑忍先生の評価があります（戦時下の同志社と私）『同志社法学』三二巻一号。影の薄いとみなされている大工原に、田畑先生はむしろいい点数を与えておられますね。逆に湯浅総長については、湯浅就任とともに同志社は悪くなつた。このようにいま、たまたま非常にあらわな形で異なる評価がでてまいりましたが、ほかにもそ

ういう場合があります。住谷悦治先生はそういう評価につきましては。

住谷 大工原は九大から首切り総長というので、なにしろ同志社へアカ狩りというようなことで乗り込んできた人ですからね。始めから非常に警戒してましたが、それが現実化してきたわけです。だから大工原総長に関してはたいへんきびしいですね。そのころ去つた人は、同志社は冷たいというので帰つてこないですよ。うちのおやじだけですわ。たまたま帰つたのは、それもしぶしぶ帰つたんで、すぐ復帰しなかつたですね。思想的に辞めていった人たちはね。

西田 田畑先生のヒヤリングをしたときに感じたのですが、例の湯浅総長のときの出来事、すなわち国体明徴論文掲載拒否に端を発して上申組、被上申組の抗争へと事件が拡大していく問題に関する先生のご意見を聞いておりまして、やはりこれはまだ時間的にいって客観的な歴史研究の対象にはなりにくい、だから、いまわれわれがなすべきことは、その問題に直接間接にかかわつた人びとの証言を含む生の史料をできるだけ広く集めることであつて、評価を加えるという作業は

もう少しあとの段階の課題として残しておくべき事柄ではないかということです。

たしかにあの時代は「暗い谷間」の時代であつたわけですが、しかし、まだそれがその責任の地位にあるかということによって、ずいぶん状況が変わってきますね。たとえば同じキリスト教学園でも、関西学院や神戸女学院は当時うまく状況を切り抜けていたわけでしょう。大日本帝国の教育原理と同志社というキリスト教学園が真つ向からぶつかったという状況認識、これはたしかにマクロな状況分析としては正しい問題把握の姿勢だと思ひますが、その困難な一般的状況のなかにあつても、実際にどういう人が総長として学園の運命の決定に参画するかによって、つまりベルゾンの如何によって状況とのかかわり方が随分ちがってくるという、いわゆる、状況とパーソナリティーの問題ですね、それを私は田畑先生とお話してゐてあらためてつくづく感じさせられました。

宮沢 関西学院のある先生が、同志社は社会的感覚を強調するにもかかわらず、戦時中は右翼からの批判があり、かえって国家主義的な動きが表面に出た、ところが関学は、玉

碑主義をとらない健全な柔軟性があつたために微温的といわれながら、同志社みたいに屈服しないでもよかつたというような評価をしているのを読んだことがあるのですが、そういう点に關してはどうでしょうか。

緒方 私は昭和一四年に関西学院に入つて、昭和一七年一〇月同志社に来たときの印象は、土地柄のせいもあるでしょうが、同志社にはずいぶん国家的な規制といひますか、なにかさういったものに懸命に應えていたやうでした。これにびっくりしたことがありますが、私はむこうで経済学を専攻していたのですが、各学部で強制出席で礼拝が守られていたのですが、こちらにはそれもなかつたし、一般に空気がとして、国家主義的ではないが、それに近いという強い印象を与えられました。むこうからすぐに来たわけですから、そう変わりはないはずですが、しかしそうした印象を与えられました。それはわずかな間でできたことではないでしょうし、ひとつの歴史的な伝承みたくになつていったのではないでしようか。

宮沢 それを湯浅総長の個性に帰すべきか、ないしは同志社というもののもつてい

性格なのか。あるいは和田先生がこういうようなことを述べておられたのです(日本・カトリック三〇年代前半の苦惱「キリスト教社会問題研究」第二号)が、上智大学の靖国神社参拝拒否事件を社会があまり問題にしなかつた理由のひとつは、当時の上智に対する社会的評価というのがはなはだ低かつたこと、それに対して同志社をたたくということにはたなきがいがあつて、そのことによつてほかのキリスト教学校に対する波及効果ということを考えて、同志社を目のかたきにしたのだという、そういう点はいかがでしょうか。

久永 私もほんとにそれはそうだと思ひます。やはり日本で、同志社のキリスト教がでんとある。これをつぶせば、あとはもうたやすいことだという……。圧迫の度合いが関学や立教とではちがつたと思うのです。だから末光信三が男子の中学から女子部に行かれた。はっきり言へば左遷ですね。それは男子の方に圧迫が強かつたんで、自由主義者である末光が女子部に行つたら中学ほどの圧迫はなかつたというのは、やはり男子校、それから他学園より同志社にいちばん圧力が加わつてきていたと思ひますね。これをつぶせ、こ

こをつぶせということだったと思います。同志社中学は野村退役海軍大佐を校長に立てたんですよ。私はひとつの便法としてこれよかったと思います。

緒方 ひとは同志社にはいわゆる志士、国家のためにという熊本バンド的な、国家への志士的な逸材が輩出していた。そうした形で始まり、それからもうひとつキリスト教的な立場で、かなり国家にとっては好ましくないような社会的な関心などが根強く、ほかの学校よりもその幅、継続の時間的なことからして、同志社はやはりいちばん強かったんじゃないでしょうか。

住谷 国士型の人がいるわね。外部のファシズムの嵐に、内部的に呼応する要素もあったと思うし、逆にそれを否定する要素もあったと思う。

西田 北垣先生、上申組、被上申組のあの問題の起ったときの湯浅さんの態度をどういうふうにごらんになりますか。

北垣 湯浅先生は、どうやらだれにも相談せずに決断なさったらしいですね。そういうやり方は、たぶんアメリカの大学総長のやり方に近いのかもしれませんが、私も、その後

大学の執行部に三年間ほど加わってみて思うことは、あんなやり方で学校のほうが三年間もようやはらはったなと(笑)、ほんとに向こう見ずというか、ドン・キホーテというか、そういう感じがしてしうがななのですが、あれでは倒れるほかないというのが偽らざる感想ですね。

しかし事実、「某助教授は人物としても学識から言っても大学教授の名に値しないというふうには私はほんとに書いた。そういうことを書いた総長はたぶん日本で私だけでしょ」と、その後おっしゃってますからね。驚くべき芯の強さだと思います。

西田 それは学問の専攻からくるのか、あるいは湯浅先生のパーソナリティーからくるのか、おそらく両方関係があると思いますけれども、ご自分の主観的な善意や確信の実行と、それが外部に及ぼす影響というものを、どの程度真剣に考慮する人かなという疑問を感じたんですけどね。独断専行型の人物にはたしかに痛快味がありますけど。

北垣 ひとおもしろいと思いましたことは、田畑先生と天皇とのかかわりあいですね。私は天皇制は否定はしない、あってもいい

と思っていますとおっしゃっている。ところが間接的に聞いたところでは湯浅先生は戦後に天皇は死刑になるべきだったという信念です。ですからいったいどちらがラジカルか。私などは田畑先生がラジカルと思ってたんですが、結局、両者ともラジカルだと思うな(笑)。

住谷 ラジカルの対象がちがうのです。

西田 田畑先生は思想的にはコンサーバティブで、というよりもトラディショナルリストで気質的にはラジカルなんではないか(笑)。緒方 ただ、田畑先生は湯浅先生の理事会組織がアメリカ的である云々という批判の点がありますね。

住谷 私は、湯浅先生はある意味でたいへんラジカルな面があると思うな。お葬式をしない、自分の遺体も医学にちゃんと提供するということをおっしゃっているわけやしね。

北垣 そこは自然科学者の信念に基づいたラジカルさで……。

住谷 いや、あれは自然科学者じゃなしに、やはりクリスチャンやと思うな。その信仰からきていると思うね。

住谷 湯浅先生はアメリカでの生活が長い

しね。日本人よりも国際人的な発想が強いんじゃないかな。

緒方 理事会組織問題にだって、アメリカでいえば、あれは当然の論理でしょうからね。

宮沢 湯浅先生の発想のなかには、こうやったら成算があるかどうかということは問題じゃなくて、こうあるべきだということが先なんでしょうね。あの時局のなかでそういう対応をどう評価するか……。

西田 杉井先生にうかがいたいのですが、原田総長の設定した路線を海老名総長は歩んだという論点をもう少し敷衍していただませんか。

それともう一点、さっきから人物、パーソナリティーの問題が出ていますけれども、原田も海老名と並んで同志社「中興」の役割りを果たした人だといえると思いますが、パーソナリティーの点ではずいぶんちがうように思いますね。

杉井 原田は小さい同志社でとどまっていたのではなくて、大きい同志社になることを期待していて、その大きい同志社というのは新島の遺志であつた、それで大学を創ると。

それで大学を創るということになると、当然学園研究の自由とキリスト教はどういう関係をもつかというのは、原田の踏まなければならぬ試し板だったんですね。海老名はちゃんとそういう試し板を前任者のあとを継いでいくというのが非常に明確ですね。また、よりリアルであるという点があると思います。教師としても。しかも論壇の雄であつた。学生を相手にしたことは教場ではなかったにしても、教会ですでにそういう経験をもつていた。吉野作造が海老名を送るときに、新しい教育をかれに期待したいというような文章を送っているのですけれども、その新しい教育というのは何かというと、海老名の時期に行われる課外講演は原田の時期からすでに始まっているわけですよね。原田の企画した線を、そういう点ではずっと継承しているわけです。もちろん、男女共学というところまでは原田は行きませんでしたけれども、原田総長の時代というのは、エディンバラに行つて名誉博士号をうけたり、アームストロングに名誉博士をうけたり、あの時期の同志社への来校者を見ると、いまでもびっくりするような外国人の名士が来て講演をしている。

西田 シドニー・ウェッブが来たのもそのころですね。

杉井 国際性という点からいえば、海老名の先鞭はやはり原田にあるということを思います。

それから人格主義のような問題も、原田は非常にきびしく自分を律した。普通学校教頭の波多野培根がやはりきびしく自分を律する人でもあるから、両者はどうしても立場上、合わないという点があつたのじゃないかと思うんです。波多野は、だから辞表をふところにしては勤めているわけです。

原田総長は、この植木の剪定をいつするとか、この椅子はいつ調度についてとりかえるというようなことから、講演、海外伝道、各学校校長さらに校友会長まで、全部やっていたんです。そういう煩雑さを最後には負いきれなくなつてしまふのですけれども、同志社中学の教員、あるいは普通学校出身者がそういう原田を見ていて、もう少し純粹になれという主張が出てきた。ですから海老名はその轍を踏まなかったのじゃないかと思うんです。

宮沢 その時点で、原田と波多野という関係で争われた事柄は、ある意味では結論が出

ないままですね。そのことがじつは、同志社が多く、の学校をもったとき、そのときの争点が整理されないままに今につながってきているというふうにも思えます。

西田 原田自身はどういう考えだったんでしょうか。同志社諸学校のあるべき関係については。

杉井 すでにそのころに、いまのような経済的な独算制の考え方が校長から出るんですね。女学校から出る、普通学校から出る……。それを原田はチェックできないのですね。そのときに処理しなかった問題というのが、現実には昭和二九年から経済的な独算制という形をとって、その独算制のもっている利点は、私もあると思いますけれども、弊害というものはまた非常に大きいものをもたらしめていると思いますね。

北垣 独算問題の歴史はもっと古いのです(笑)。校長先生として久永・仁井両先生ともその問題ではご経験済みで、悩まれましたでしょうね。

仁井 いや、財政好調のときはいいんですけどね。財政不振になってきますと独算制は困ると思います。勝手な話ですけど、みなそ

うなんですね(笑)。私が昭和二三年に就職したころは、神学部の方に中高から流れておったんだということを盛んに聞かされましたですからね。

久永 戦争の末期は大学生がいなくなりました。中学、女学校の方が大学を支えてたんです。

宮沢 さらに、大学内部で学部独算制というような発想が出てきたりすると、独算制のプラス、マイナスを改めて考えるべきだと思うのですが。

杉井 たとえば、かつて女学校が自分の資本を他に流用しないではいいというのは、女学校資本というのは正確に始めからあるからなんですね。英学校とは別個であるという、非常にこれは強い意識ですね。

宮沢 それは女学校の同窓会のたいへんな献身と、それから海外からの寄附が女学校にくるという、ある意味では同志社のなかでは恵まれた条件を手に入れた。それを同志社的な規模に拡散してしまっているのかという、これは献金してくれた人たちに対する責任の姿勢の反映であると同時に、多少のエゴイズムがまじり合っているだろうと思うのです。

それを全同志社にプールして用いていくべきであるというふうにするためには、同志社にあまねき教学の理念というものが、たとえば総長や理事長などを中心に、よほど徹底できなかったら、そういうことになって行きにくかったらと思ういますね。

西田 『百年史』の編纂方針にかかわる問題について少し発言してもよろしいでしょうか。

ここに企画委員の御三方がいらっしゃるのをお考えいただきたいのですが、基本方針のひとつが近代日本の歴史における同志社の位置づけを明らかにする、ということになっておりますね、そうしますと、とりあげられるテーマは従来の狭い「学校史」の枠からどうしてもはみ出るだろうし、また、はみ出ることにそれほど頓着することもないのではないかと。もちろん正史である以上、同志社で活躍した人びとが重点的考察の対象になるのは当然だと思いますが、たとえば、私の専攻に近い方面で言いますと浮田和民、安部磯雄、それからやや社会思想のジャンルに入りますが山川均、高畠素之といった群像——彼らはいずれも同志社から出ていった人たちですが、

たとい活動の場が外であつても彼らによつて形成されたいわば「同志社政治学」ともよぶことのできるスクールを日本政治学史のなかで検討するような項目は、やはり設けられてよかつたのではないでしようか。

もうひとつは、前橋英学校のように、海老名、小崎らによつて新島の意を体して創られた外部の学校の研究ですね。そのほか、北越学館の名前も出ましたが、幾つかのそういう種類の学校が新島の教育理念といったいどのようににかかわっていたのか、学校教育と伝道活動を結合させようとする新島の思想をより深く、かれ自身の日本の近代化の構想の分析にまで視野を広げていくことですね。これはむしろ今後の課題なんですから。

宮沢 それと、同志社教会を始め各地の教会や宣教師たちによる幼稚園などに及ぼしていけば、もっと目を注ぐべきところはあつたろうと思います。

西田 東大や早稲田系の政治学と比較する意味でも、ラーネットから蘇峰、浮田、安部、大西祝らにいたる「同志社政治学」を分析するような項目があればおもしろかつたんじゃないかと思ひます。さつき留岡幸助の名前も

出ておりましたけれども、ここを卒業して外でそういう大きな事業や学問研究をおこなつたような場合は、これはやはり何らかの形で学校史の中に位置づける努力が必要なのではないかという感想です。とくに折角、「近代日本百年のなかで同志社百年の問題を考えろ」という看板をかかげているのですから。

北垣 私はいまの論点はいへん興味深く、また反省をもつてうかがつたんです。ただ、そういう意味ではやはり法学部の政治学などのことを本当に興味をもつておやりになつた方がたが、そういう文献を残していただくだけではできません。それがあまりにもないので、それを『百年史』であらためてやるという余裕はなかつたわけです。ですから、できるだけ各学部などでまとめておいてください、という感じがいたします。次のオフィシャルな歴史が出る場合には、そういったものが基礎になります。こんども『回顧七十七年』（大塚節治著）があればこそいふんなことが書けましたし、池袋清風の日記しかりです。やはり『百年史』というのはいろんな方の協力のたまものなんです。

住谷 明治の終わりから大正にかけての、

その辺が抜けるわけです。というのは企画でこの辺だけ書けというふうに出てくるので、前後がわからないわけです。もつていきやうで流れがちょっと断絶するね。山川を書かないかと思つても、これは大正時代に書くのやないかと。だから横と縦をつなぐその辺が……。

杉井 横割りにしたために、縦の流れで追うべき人が残つてしまつたというか、言及しないのがたくさんあるわけです。

住谷 断層があるんですね。

杉井 北垣先生もおっしゃつたように、この『百年史』を契機にして、同志社政治学のようなので学部史が、あるいは学科史が正確に書かれていけば、さらに新しいものが成立すると思ひますね。

西田 それと、法学部なら法学部で、できるだけ学部史を中心とした史料の蓄積につとめますが、やはりそれをオーガナイズしてくれる組織、機関が必要ですね。社史史料編集所あたりがリーダーシップをとつて、各学部や諸学校とコンタクトをとつていただいて、蓄積され蒐集された資料を社史で保管していただくなり、あるいはアドヴァイスを与えて

いただくという形で社史史料編集所は今後活躍できないものだろうか。

宮沢 それはぜひとも必要なことですね。

学部、学科という学問分野だけでなく、これも和田先生のおっしゃっていることなのですが、戦前日本中のどの大学もまねすることのできなかった同志社混声合唱団をもったというのは画期的なことであるし、そうした文化面における役割り、あるいは同志社文学の果たした役割り、スポーツなどの面でも配慮すべく不十分であった。顧みると同志社の各学があるいは大学で、日本における先駆的開拓的な役割りを各分野で担っていた。それが連綿と続くかどうかは別としても……。そういうものはやはり記録しておきたい。

住谷 同志社を離れても、先駆的なことをやっている人が多いわけね。野球でも安部磯雄が早稲田でやっておるでしょう。浮田和民でも出てからやっているわけでしょう。山川均もそうやし、同志社を出てからよそで先駆的な役割りを果たしている。

宮沢 留岡の場合、活躍中、同志社が支えになっていたでしょうか。

住谷 留岡は同志社をたえず批判して、同

志社出身の牧師が教会のなかだけでやっているのを攻撃している。その点じや同志社批判が強い人じゃないかと思う。同志社へは批判するために帰ってきているわけですよ。しかし自分は新島の魂を継承しているという形でやっていますからね。

宮沢 海老名の同志社への帰り方はどういうことでしょう。かれも一種の批判を……。

杉井 海老名は同志社不要論を唱えたことを言っている人を総長に招くというのはたいへんな反対があった。そういう人を総長に招いたというのは、同志社の当時の雅量だったと思うんですけどね。

宮沢 のみこむ力をもっていた。

緒方 いまはとも考えられない(笑)。

西田 いつか住谷悦治先生は同志社における輸血という問題をおっしゃったことがあります。ひとつはアーモストやアメリカン・ボードを中心とするアメリカの血、ひとつは熊本バンドの血、それから大正期の東京大学の吉野作造と新人会の流れ、そのほか無数の外からのフレッシュな血を受容することによって、同志社は大きく成長していったというこ

との強調だと思いますが、外来のものに対する寛容の姿勢はやはり同志社のひとつの伝統としてあるんじゃないでしょうかね。緒方先生のご発言のように、いまの同志社にそういう意味での雅量が衰滅しつつあるというのは、ひとつの警鐘としてうけとめる必要があるのでは。

緒方 よほどの無難な人でなければ(笑)。

同志社に批判的な人は、とうていいまの同志社はむづかしいですね。学内は混然となっています。無難な人を入れたほうがいいのではないかという解決のため外から迎えることはありえても、批判的な人を迎えることはありえない。それだけ私どもの批判的な精神というものが鈍っているのかもわかりませんね。

宮沢 もうひとつ忘れることのできないことは、第二部で土肥先生が扱っておられる「キリスト教主義学校同志社の苦悩」という主題があります。明治期における例の訓令一二号をめぐる、あるいは徴兵猶予の問題を同志社がどういうふうに受けとめてきたかということと、昭和前半の戦争の時代にキリスト教がどういうふうな内と外から考えられてきたかということ、さらにいまの同志社のキリ

スト教というのはどういうふうに位置づけられるべきなのか。つまり国家からの、あるいは社会からの圧迫がなくなって、宗教教育が全面的に自由化した段階で皮肉にももう宗教はいらないというような困難な問題をかえこんでいるとすれば、現代の同志社におけるキリスト教という問題は教育の面でのうんだということが課題だろうと思うのです。仁井先生、まえにそのことを書いておられましたね。

仁井 一口に言いますと、いまはそういう国家からの圧迫がなくなって自由になった反面において、一般の教職員が無関心になってしまつて、キリスト教教育というものを無視するといえますか、そういう状況だと思うんですね。

宮沢 キリスト教を揚げて同志社をたてながら、もはやキリスト教を揚げなくても同志社という名だけで十分通用するような、そしてそうであることからキリスト教が軽んじられていく面があるということでしょうか。

仁井 はい。

緒方 『百年史』を読みまして、とくに初期のキリスト教について、私はかなり難な理

解しかもつていなかったことに気がつきました。私は従来、当時、外部の仏教徒からのいろんなプレッシャーはあったにちがいないとは思つておりましたが、しかし近代化の潮流の中で比較的スムーズにいったのではないかと思つていました。第一部を読みますと、たとえば授業の仕方、科目の内容はもうろん名称、それから非常に驚いたのは、京都府の学務課がひんばんに同志社を監察して、聖書を用いていることなど強い批判をし、責めていますね。さらに、第一部の国家体制が整い、帝国憲法、教育勅語、それ付随して学校の整備などいろんな政府の方針によつてずうっと締めつけられていきましたが、考えてみればそれは、第一部からの続きであつて、大正の一時期しばらくの間を除きまして、結局非常にむづかしい時代を通じてきたというふうに思います。

では今後の問題というと、神学部の一教師として責任を感じてますが、量の問題があり、教師の、いま仁井先生が言われたようなキリスト教への感覚の問題があり、一方、最近の学生の年齢層における意識の構造というものもあり、ずいぶんむづかしく、本当に協力し

努力して、キリスト教主義教育というものを進めていかねばならないと私は思うのです。

久永 私は、人の問題が第一番だと思うんですけどね。たとえば、グイン先生という方が同志社中学におられて、中学にとっては波多野培根がもし父親とするならば、グインは母親だった。デントンが女子部で母親であつたと同様に。私も英語科で席を並べておりますと、グインがそこに座っているだけで人間の高潔さがじかに伝わってくるんです。一年生の英語をもたれまして、その英語プラス宗教的な感化、これは強烈だったんですね。この方が二〇年間お教えになりました、同志社中学の卒業生はみんな胸の奥深くにキリスト教的なものをたくわえていったわけなんですけれども、こんど、そのことを書くにもわずか二十数枚のスペースで書けないのです。三行しか書けませんでした。どこかほかで宣教師のところで書いてあるかと思つて調べたんですけれども、第二部の「明治期の同志社の宣教師たち」の中に、デントンはそれは偉大な方ですから九ページほど書かれてゐるのは当然だとしても、そのあとにグインは九行ほど書いてあるだけです。私、責任を

感じるんですけどね。もうちょっとスペースが与えられたら、グインの力の大きさを書きたかったという心残りがあります。

やはり、私は人間だと思うのですよ。あの方がおられたときは、それが電波のように広がっていったと思うのです。だから強力な人事権を本部の首脳部の方が持たれて、こういう方を連れてくることでできればと思うのですね。いまはそういう人事権がない。各学校の人事委員会に任せっきりなんですね。クリスチャンの先生を招くことができない。これがいちばん弱味だと思うのです。

緒方 最近アメリカの旧組合教会、旧アメリカン・ボード関係からの宣教師といったら、結局いま来ておられるのは……。

北垣 UCBWMとしてはウィリアムズ先生、ラッシュ先生、そして深田先生の三人です。

緒方 そういった点でも希薄になっているのではないかと思います。旧アメリカン・ボード関係のポリシーの問題もあり、ミッシェナリーの位置づけの問題もありますので、以前のような形ではいかないかと思いますが、やはり人を得ることがいけばんだ事です。

す。これは日本人についても同じです。

宮沢 戦後の問題にあまり触れることができなかったのですが、巨大化した同志社大学における問題を、いまのキリスト教の問題もからめて。

北垣 現在の巨大化した同志社で、キリスト教主義教育がどこまで行われているか、あるいはどこまで可能かというようなことになる。と大問題でありまして、うかうかしているキリスト教主義は消えていきはしないかという危機感さえ覚えるほどです。

しかし考えてみますと、ハーヴァードにしても、その他欧米の、牧師を養成し神学者を養成するというようなことを掲げていた各大学は、みなそれぞれの意味で世俗化している時代でもございます。どれだけ新島のもととのキリスト教というものを二〇世紀後半、あるいは二一世紀に向けて生かしていくのか、もういっぺんしっかりその定義をし直し、考えなおさなければならぬ時代にきていると思います。

宮沢 最後に、まだ書物になっておりませんが、実感になりにくいかもしれませんが、『百年史』の通史編をお読みいただきまして

のご感想をお願いします。

緒方 私は、杉井先生がおっしゃったように、やはり近代日本の百年の歴史が同志社という学園に収縮されて、そのひとつの縮図みたいなものをまじまじと見ることができたということ、それから日本の近代史を振りかえってみると、私たちの年齢からすればやはり国家体制、それと非常に違和感をもったキリスト教主義学校との関係というものを、いろんな具体的事例を通して読ましていただいたというのはありがたかったと思います。また今後の歴史ということを見ると、かつて通った道と同じ道であってはならないだろう、しかしある意味では欧米の歴史からすれば短い歴史ですし、そう短兵急でなくして、じっくりと大事なことを見すえ、今後の同志社の歴史というのを考えていかななくてはいい、と感じました。

住谷 巨大になった同志社を考えるとということと関連して、これから先を考えるときに、やはり過去を丹念に振りかえってみて、ぼくらのじいさんぐらいの代からですわね、その辺からの歩みというものを、もういちど振りかえって将来を考えるとという時点に立つ

ていると思う。それがなければほんとに日本の文化というのは滅びるのじゃないかと思うし、このままでは同志社自身もあかんようになるのではないかと、そういう危機感があるわけでしょう。そういう時期にわれわれ過去の同志社の伝統といいますが、そういうふうなものを教職員学生すべてが振りかえってみる姿勢が必要だと思うんですね。初心にかえるといえますか、原点に戻るといえますか、そういううえにおいてこの『百年史』のもつ意味は非常に大きいという気がしますね。

西田 温故知新という耳慣れた古語がありますけれども、私はあらためてその重要性を感じました。

それで、とくに印象的なふたつの教訓をのべたいと思います。ひとつは、大正末期に、今中次麿氏がキリスト教主義を立学の精神とする学園で、とくに大学でそれを生かす、ということはいったいどういうことなのか、という問題提起をしているんです。私はいまなお、その問題は未解決の課題としてわれわれの前にあるという気がいたします。もうひとつは、学問研究と教育の灯を吹き消す外からの圧力

と並んで内側におけるさまざまな葛藤と抗争というような問題を同志社は繰返し経験してきたことが指摘されましたが、たとえば昭和初期にその実例をもとめると、中島重の採っていた神学の立場、SCMに対する根強い反発が、当時神学部の中から起ってやがてそれが中島の辞任のひとつの契機となったというように聞いております。学問や思想がお互いに異説を唱えて争うのはいつ頃からかありませんが、問題は学説上の対立が、往々にして同僚を排斥する方向にむかうという悪しき伝統にあります。この問題はもちろん、同志社に限った現象ではありませんが……。心して考えるべきは、異説に対する寛容の精神をいかにして、われわれ自身が保持していくかという問題だろうと思いますが、外からの圧迫と同じ重さをもって、いかに内側におけるそういうインヒューマンな、非寛容な姿勢が学問と教育を衰弱させるかということを具体的に考えさせられた次第であります。

仁井 久永先生が枚数の制限があつてギインのことが書けなかったとおっしゃいましたでしょう。『百年史』をずっと拝見しまして、中高関係の枚数の制限がきびしかったと思う

んです。大学関係はゆったりしている。ですから私どもはいろいろな項目を狭い範囲内に無理に押し込んだような感じがしましたね。百五十年史のときには枚数をもう少しふやすべきだと思います。

久永 始め中高で二〇枚だったんですよ。二〇枚じゃとてもできない。だからちよつとふやまして三五、六枚になったんですが、でも中学と高校は別々でしょう、ですから一校について一五、六枚ですよね。とても書けなかった。ゲイン先生もはみ出しちゃったわけです(笑)。

宮沢 そういう点からしますと、私も企画委員の一人ではございますが、中高とともに女子部にももう少しスペースがあつてもよかったということを感じております。最後に、北垣先生、杉井先生、いまの諸先生のご見解におこたえするような意味でも……。

北垣 新島が勝海舟に述べたように、同志社の完成は二百年というふうに考えると、『百年史』はその折り返し点を回ったところということで、百年を真剣に振りかえる機会でもありましたし、これは反省の書であると同時に、自己批判の書でもあるということ

であります。今日承りましたことは、それぞれまことにそのとおりでありまして、こういったことが次の同志社の公的な歴史が書かれる場合にすべて生かされていけるように、いまから手だてを講じたいものであります。

宮沢 そのことに関連して、西田先生から注文が出されておりましたが、社史史料編集所ではこれを機に、新たに見つかったこと、足らなかったこと、あるいは『百年史』で誤認していたことなどをフォローしていくための紀要を、たぶん来年度から発刊できるだろうとのこと。そのなかにせひ、今日出てきました問題を含めまして、新しいものを発掘し、またそこへ解釈をほどこしていくということを積み重ねることで、百三十年史なり百五十年史なりに生かされるような準備がなされていくだろうと思います。

杉井 『百年史』はどういう史料をもとにして書いたかという、社史に所蔵される同志社の正式記録に基づいて、正式記録のないときには公刊されている、たとえばさきほどの例で言いますと『回顧七十七年』というようなものを利用しました。したがって、今後百十年史あるいは百五十年史が書かれると

すると、そういう収集された史料以外に、各人がお持ちの日記とか、あるいは各学部の教授会記録とかいうようなものが利用されていくようになれば、さらに多角的な視野から検討ができるのだらうと思います。

いま宮沢先生がおっしゃるように、社史のほうでは、百十年までをひとつのめどにして、そういう史料の発掘と、それから論説、オーラル・ヒストリーの編集というようなものを続けていきたい、そうすることによって『百年史』の欠を補いたいということを考えております。

それからもうひとつは、久永先生からご指摘のありましたように、大学に重すぎて中高に薄いという、これはもう当初からそれを自分でも思いながら、そういうページをじつはいたしました。各主題はだいたい五〇枚で、少し多くて七〇枚。三〇、五〇、七〇、例外として第五部の大学一四〇枚ということにいたしました。そういうことで非常に圧縮をしてお書きいただくことをお願いしてしまつた失礼さというのは、私はほんとうに申しわけないと思っております。

さきほど申しました紀要というか、何とい

う題になるかまだ決めておりませんが、今日お話の出たような問題——たしかに人物史が欠けたり、たとえば外国人宣教師は書かれていのですが、日本人牧師というのはないわけ。それから同志社の財産とか会計の問題だとか、寄宿舎の問題とか、外国人留学生の問題とか、そういうような主題はたしかに積み残したものがあつたわけで、それをフォローしていっただけばというふうに思ひ、北垣先生と同様に私も反省の書であるとともに、じつはやはりこれからのひとつの踏み切りの書だというふうに思っております。

宮沢 『同志社百年史』は発刊されようとして、今日すでにこのように語られてまいりましたが、今後この書物が同志社人のあいだに読まれ、一層さかんに語られることをねがひましてこの会を開かせていただきました。年末ご多忙の御ありがとうございました。

(一九七九年二月一〇日)

* * *